

命をかけたはつこい

八百屋お七阿波へ渡る

「八千代の歴史と文化」
のこしたいもの
つたえたいもの ⑩ 監修 小林 弘治
絵 小出 忠美

成田街道沿いの大和田小学校の隣に、天受山長妙寺があります。「妙栄信女天和癸亥三月二十九日」と刻まれており、淨瑠璃や歌舞伎の演目で知られる「八百屋お七」の墓と伝えられています。

本郷の八百屋の娘お七は、火事で近くの吉祥寺（実説では円乗寺）へ避難、寺小姓の小野川吉三郎の指のとげを抜いたことがきっかけとなり恋仲となります。娘心の一途さで、もう一度火事になれば吉三郎と再会できる…と思いつめ、火付けの罪を犯します。江戸は大火となり、お七は鈴が森で火刑に処せられます。天知三年（1683年）

三月二十九日、お七は十五歳の短い生涯を終えます。

罪人の埋葬は禁じられていましたが、養母の実家のある萱田町長妙寺に、密かに葬られたのであります。

徳島市吉野本町宝珠山万福寺の資料では、お七の養父元兵衛は万福寺の檀物語では八兵衛、お七の年は十六歳である）阿波徳島城下、助任町の八百屋でしたが、藩主蜂須賀公の参勤交代に貢い方として同行、そのまま江戸に永住することになります。夫婦には子どもがなかつたので、姪のお七を養女としたのです。

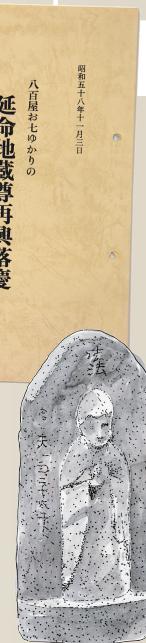
事件の後、吉三郎（順覚）はお七の菩提を弔う行脚に出ます。寄せられた喜捨を手に江戸に戻った順覚は、三体の露座仏を造ります。そして、そのうちの一体を吉祥寺へ奉納、もう一体は鈴が森へ安置しました。

残る一体は養父元兵衛の菩提寺、万福寺へ奉納されることになります。

万福寺のお七地蔵の台座には「武州江戸日本橋三丁目河岸ヨリ出仏、海陸運搬シテ阿州徳島渭ノ津北助任万福寺ニえヲ納ム。順覺坊同道ス。享保十三年」と記されました。お七歿後45年のことでした。

このお七地蔵は、戦時物資として供出されました。昭和58年11月、八百屋お七ゆかりの延命地蔵尊として再興奉納されました。

お七の亡骸が萱田町の長妙寺に埋葬されていましたことを順覺坊が知っていたならば、三体めのお地蔵様は長妙寺に奉納されていましたかも知れません。



▲長妙寺にあるお七の墓

昭和五十八年十一月三日
八百屋お七ゆかりの
延命地蔵尊再興落慶

徳島市吉野本町五丁目
宝珠山万福寺

世のあわれ
春ふく風に
名を残し
おくれ桜の
今日散りし身は